

審査委員長 山梨 知彦

現代建築を構成する定番素材であるガラス。手垢のついたガラス観を一掃するような問題提起がそろそろ試みられてもいいのではとの想いから、テーマにはこれまでガラスに抱かれてきたイメージとは程遠い「あたたかい」という言葉を選んだ。上位者はこのキーワードに敏感に反応していたものの、コンペの趣旨から外れた応募案も多く、透明で、鋭利で、もろく割れやすいといったこれまでのガラスのイメージが、いかに深く我々の潜在意識の中に刻み込まれているかを再認識した審査過程であった。【提案部門】では、「Glass-Transition House」の天井から溶けるよう垂れ下がるガラス天井の美しいドローイングが注目を集めた。ホフマンがデザインした、蜜をテーブルの上に注いだかのような造形を彷彿とさせるが、ここでの形状は常温で蘇生する有機ガラスが重力とのバランスが生み出したもので、これまでのガラスの持つイメージを、温かさをキーワードとして引き出している点で、テーマに即した王道を行く回答であり、満場一致で最優秀案として選出された。個人的には、既存のガラスでありながら、そこにつく傷から新しいガラスの温かみのある表情を提示した「ガラスについてのキズ」や、身体性を感じさせる制作過程から繭のようなこれまた今までのガラス感を変える美学を押し出した「Self-Container」などにも強く魅かれた。

【作品例部門】では、応募に際してテーマを課したわけではないが、最優秀となった「上越妙高駅自由通路東口もてなしドーム」が、他とは違った暖かみのあるガラスの表情をつくり出すことに成功していた。ガラスブロック壁の部分に重ねるように設けられた木ルーバーの効果であろうか、この施設の特徴となっているガラスブロックの多角形の塔の内外が暖かな色合いを持った光で包まれている夜景写真は、現地を訪れてみたいと思わせる説得力があり、審査員の票を集め、結果につながった。

審査委員 藤本 壮介

このコンペの面白いところは、単なる空間デザインを超えてガラスという素材そのものの本質や可能性までさかのぼった視点から、建築や空間、そして私たちの生活環境を思考し直すという点だ。今年も、ガラスというすでに当たり前に見えるけれども実は無限の可能性を秘めた素材に対して、さまざまなアプローチが提案されていてとても楽しい審査だった。テーマが「あたたかいガラスの家」だったことから、ガラスという一見無機的で冷たい素材の印象を超えた、新しい豊かさのイメージに形を与えることが出来た案が、最終的に入選を果たしたと思う。最優秀賞の齋藤案は、柔らかいガラスと土壌+樹木という組み合わせの意外性と新しさで目を引いた。地下や地上という概念を超えていくような、鮮やかな提案だった。人間と地球の距離が新しく捉えなおされた瞬間だったと言えるかもしれない。優秀賞の関谷案は、ガラスにとって不完全であるはずの傷というものにこそ、ガラスと人間のコミュニケーションが生まれるのではないかと、という提案だ。建築が、人間と時間との関わりの中で初めて生まれてくるものだと改められて気付かされる。入選の木村案は、一言でガラスと言っている素材そのものが、実はさまざまな現れ方をするものであり、地中奥深くの地球そのものから人間の生活に近づいていくいわゆるガラスに至る変異をそのまま建築空間として立ち上がらせた。素材と建築と体験の融合に建築というものの本来的な力を感じた。

【作品例部門】では、最優秀賞の『上越妙高駅自由通路東口もてなしドーム』の、正面切ったガラスブロックの表現が圧巻だった。ボリュームの扱いとそれを徹底的にガラスブロックで包むディテール、さらにライティングが相まって、新しい存在感を作り上げている。

審査委員 菅 順二

今回の課題は、「あたたかい」と「家」という一見、平易な言葉で「ガラス」を挟んだものだけに、発想を飛躍せるのになかなか苦労した様子が窺われる。そうした中で「あたたかさ」をどう表現するのかということに出題側として関心があったのであるが、結果としては時の移ろいをガラスで表現したものが上位に残った。【提案部門】最優秀賞の齋藤案は、その中でもアイデア、グラフィックとも印象的であった。融点の低い有機ガラスの屋根面が時間を経て森の成長とともに新たな大地となり、それを透明な鍾乳洞となった室内から見守るというもので、洗練され過ぎた感もある情景である。それ故「家」との結びつきは弱い。優秀賞の関谷案はガラスに生活の痕跡がキズとして残ることで温かさの表現としている。キズを重ねるほど擦りガラス状になって足元から入る光は柔らかくなり温かくなるのが物語性を感じさせる。入選のなかでも風化によるキズをあつかった倉員案や、ガラスの生成過程を家形に表現した木村案など、それぞれ「あたたかさ」の表現に工夫があったが、「あたたかい」と「家」を両立させた提案は少なかった。

【作品例部門】では、ガラスブロックの作品応募が多かったが、その中でも最優秀賞となった「上越妙高駅自由通路東口もてなしドーム」は、外壁のガラスブロックと室内の木質ルーバーの重ね合わせが昼夜それぞれの表情を創り出している。優秀賞の「双倉の家」は、図面がないのでエキスパンドメタルの納まり詳細は分らないが、建築のパーツとしての面白さは感じる。入選の中で、「道頓堀川遊歩道」は都市の景観づくりとして好ましい取り組みである。やはり水と光は同じ流れるものとして相性が良い。しかし今回は全体的に素材の使い方に新規性や独創性を感じさせるものが少なかった。また、ガラスブロック以外の作品の応募にも期待したい。

審査委員 大浴 成一

空間デザイン・コンペティションは、おかげさまで第22回を迎えることができました。関係者各位、ならびに応募者の皆様方に深く感謝申し上げます。

ガラスは固体でも液体でもない物質であり、表面は時とともに風化しますが、数千年にわたり変化しない安定した材料です。

今回、提案部門の【あたたかいガラスの家】という課題に対して、そのガラスの本質・特性を提案に盛り込んだ作品が多く、大変興味深いものでした。

【提案部門】最優秀賞の齋藤案「Glass-Transition House」は、ガラスは硬くて常温域では変形しないものという固定観念を捨てた意表を突いた提案でした。太陽光でガラス屋根が温められる→変形して部分的に垂れ下がる→枯葉が堆積する→草木が育つ→屋外の自然と屋内の空間が一体化し、時とともに変化する、という巧みなストーリー展開に深く感心させられました。優秀賞の関谷案「ガラスについてのキズ」は、ガラス製品では不具合とされる「キズ」に着目したユニークな提案であり、日々の生活行動により加えられたキズやヒビによる光の拡散や屈折、反射について良く観察し研究されていました。これらの他にも「ガラス」と「あたたかさ」という一見相反するものを上手く結び付けた作品が多く、それぞれに発想の豊かさと柔軟さを感じることができました。【作品例部門】最優秀賞の「上越妙高駅自由通路東口もてなしドーム」は、圧倒的なボリューム感と灯籠のような暖かな光の美しさが目を惹いた作品で、乳白色のガラスブロックと木質の格子が良くマッチし、あたたかいガラスの空間を造りだしていました。優秀賞の「双倉の家」の目隠し塀は、ガラスブロックとエキスパンドメタルで構成されており、光も風も通すなど、ガラスブロックと金属が通す柔らかな光と風が心地良さそうで、住む人への優しさを感じさせる作品でした。これらの他、弊社のガラス建材と別の素材を上手く組み合わせた作品や、自然光、照明を絶妙にデザインに組み込んだ作品が多く見られました。今後もこの空間デザイン・コンペティションを通じ、ガラス建材の魅力を実際立させる使い方が広まっていくことを期待するとともに、受賞者の皆様がこの受賞を足掛かりにご発展されることを祈念いたします。